



18
「灯」

ロウソクの火を消すとき、ちよつとだけ躊躇ちゆうちゆうする。

何もしなければまだ灯り続ける明かりをふつと消してしまふのが、なんだか申し訳ない気がしてしまうのだ。

寝る前のひととき、机にキャンドルを持ち出し火を点けた。この前、家のどこかにしまったはずの単三電池を探していた時に、ついでに出てきたロウソクだ。たちまちシトラス系のいい香りが漂う。湯気の立つカップを片手に、暗がりの中、炎の芯の青と外側のオレンジが作るコントラストを眺めていた。ゆらゆらと楽しげにゆらめき立つ炎は、ナチュラルハイ気味の僕の心と波長が合っている。そして薄暗く霞かすんだ視界は、まるでこれから先のことをぼんやり映しているみたいだった。鮮明には見せてくれない、あいかわらず不確かな世界だなと思う。

ロウソクの火は不思議だ。いつもすぐに揺れはじめる。閉めきった室内、風なんて吹いていなさそうなのに、炎はなにかを感じ繊細に揺れ動いている。手元の湯気が空気を動かしていたり、自分のちよつとしたしぐさや呼吸でさえ『流れ』をつくっているのかもしれない。

こんなとき、無風だと思っていた空間にも見えない気流が存在していることに気づく。

変わり映えのない日々。大きな変化もなく、ただ過ぎていく時間。そんなふうに感じていた日々にも『動き』はあるんだろうか。目に見えないだけで、少しずつ、どこかが揺れて、どこかが進んでいたんだと、あとからそんなふう
に思えたらいい。

いよいよロウソクの火を吹き消す。その直前、ほんの少しだけ目を凝らす。それはちょうど、火の灯ったロウソクからまた別の松明たいまつへと炎を移していくように、瞳にメラメラとしたものを宿す作業だ。そこにあるのは、吹けば消えてしまう儂いともしび灯。

——「動いてるよ」って誰にも聞こえない声で、消される前の小さな炎が言った気がした。